

内々神社庭園現況調査に関する報告

Report of survey on Current Condition of the Garden of Utsutsu Shrine

岡田憲久

Norihisa Okada

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

内々神社庭園は愛知県春日井市内津町に所在する池泉庭園であり、夢窓疎石(国師)作と伝えられ、愛知県指定文化財(名勝)に登録されている。谷あい位置する庭園は内々神社本殿の背後にあり、背景には内津峠の山々が連なる。この背景の一部には「天狗岩」と呼ばれる巨大な岩盤があるほか、池泉庭園背後の平地には巨石が点在している。また、内々神社から約600m北の山中には古くから信仰の対象となってきた岩窟「奥之院」がある。

内々神社における信仰形態は神道、天台宗、妙見信仰等と様々に変化し、それに加え火災等で敷地の使用形態や建造物の性格・形態も変化してきた。しかし当地が信仰の地となり、またそうあり続けたことには露出した岩盤や巨石に見られる超自然的な景観が大きく寄与しており、庭園においても視覚的、意図的に重要な背景となっていたと思われる。しかし現在、その景観は繁茂する樹木等により隠され、庭園は池庭のみが独立した空間として鑑賞されがちである。

今回の調査は、昭和46年(1971)の重森三玲による実測以降初めて実測調査を行なうことで現況を把握し、池庭と岩盤、巨石群との視覚的、意味的なつながりを再認識した上で、一体のものとして管理していくための指針作成を目的とする。

(2) 調査の範囲と内容

i) 測量

範囲は内々神社敷地を中心に東は東海自然歩道、北は天狗岩と巨石群が入る範囲、南と西は敷地に接する道路までとし、200分の1の精度で地形測量を行なった。

ii) 写真撮影

平成20年5月22日、8月4日、8月8日、12月24日、平成21年3月5日、3月18日に岡田憲久が撮影した。

iii) 資料調査

春日井市教育委員会文化財課、及び春日井市図書館所有の文献を主な対象とした。

iv) 聞き取り調査

内々神社関係者等に庭園及び周辺の近過去における変遷、現在の管理状況等を聞いた。

2. 内々神社の概要

(1) 内々神社の立地

内々神社は愛知県春日井市の東北端、岐阜県多治見市との県境にある内津峠の西南、県道内津勝川線(旧国道19号)沿いに位置する。約400m北には中央高速道、100m北には国道19号が通り、その北側一帯は採石場となっている。内々神社の標高は県道沿いの地点で172m、東南に位置する内津峠は標高約250m、西側と南側は標高約230～250mの山々に囲まれた、急傾斜地に面した谷地にある(図1)。

庭園は昭和42年8月28日に愛知県指定文化財(名勝)に登録された(昭和58年3月30日に追加指定、図2)。内々神社敷地周辺は愛知県高原国定公園に含まれる(図3)。内々神社敷地を除く周辺は砂防区域に、内々神社庭園を除く境内地は土砂災害警戒区域、急傾斜地崩壊危険箇所等に指定されている。内々神社東側の山腹には東海自然歩道が南北に通っている。

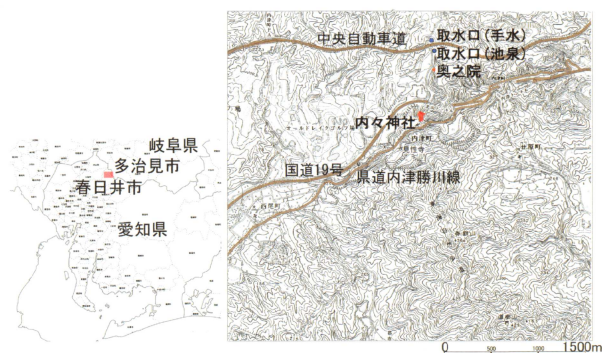


図1 内々神社位置図non-scale (元図: 国土地理院数値地図)

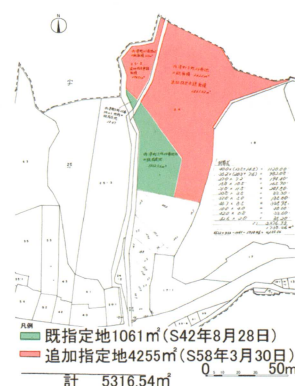


図2 愛知県名勝指定地

(2)自然

i) 地質

地域全体の地質は中・古生層で基盤のチャート層の上に、チャート・砂岩・頁岩・石英斑岩などの礫からなる第三紀鮮新世の砂礫層が覆っている。急傾斜地では基盤層が荒々しい岩盤の露出となって随所に表れ、内々神社周辺の独特な景観を形成している。内々神社の北西では基盤層の岩石が土木用骨材のための採石場があり、地形が大きく改変されている。境内地にあたる山地は青灰色あるいは灰白色の層状チャートが東西の方向性を持って複雑な褶曲構造として表れている。(図4、参照『春日井市史 地区誌編1』)

ii) 植生

内々神社周辺の植生はコナラークリ群落とスギ、ヒノキ、サワラ植林が入り組んだ中に一部アラカシ群落が見られる(「第2回自然環境保全基礎調査(1981)」、環境省)。コナラークリ群落と植林地は人間が手を加えてきた林であるのに対し、内々神社周辺は長く聖域であったため本来の自然植生に近い常緑のアラカシ群落が残ったと推測できる。

『春日井市史』によれば、伊勢湾台風(1959年)が植生に与えた影響は大きく、境内地およびその周辺の植生はスギ、ツブラジイ、ツクバネガシ、アラカシなどによる極相林の呈をなしていたが伊勢湾台風で老木、大木が倒れた。現在の植生は伊勢湾台風後に形成されたものであり、高木層にスギ、ツブラジイ、タブノキ、アラカシ、中低木層に常緑樹であるサカキ、ヒイラギ、ネズミモチ、ソゴ、アオキ等と落葉樹であるホオノキ、コシアブラ、リョウブ、タカノツメ、コアジサイ、ムラサキシキブ等が混在する林相となっている。

地被植物では、伊勢湾台風以前は本殿裏の庭園の樹木の幹に暖帯南部に自生する様々なラン類が着生していたが現在はその姿をみない。岩壁や湿潤地にはカタヒバ、ヌリトラノオ、シンラン、ヒトツバ、フユイチゴ、シャガ、オオサンショウソウなどが群生しシダ類も多種生育していたが、現在は岩肌が見えないまでにかん木が繁茂している。こうした変化は山林の維持管理が以前ほど実施されなくなったことも大きく影響していると思われる。(図5)



図3 国定公園指定地(国土地理院数値地図、愛知高原国定公園計画図(写)を元に作成)

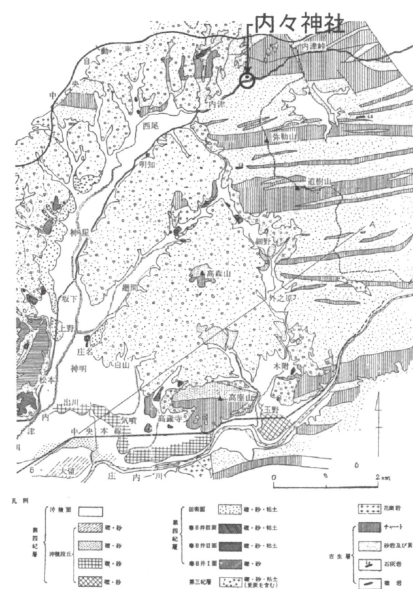


図4 高蔵寺・坂下地区地質図(『春日井市史 地区誌編1』)

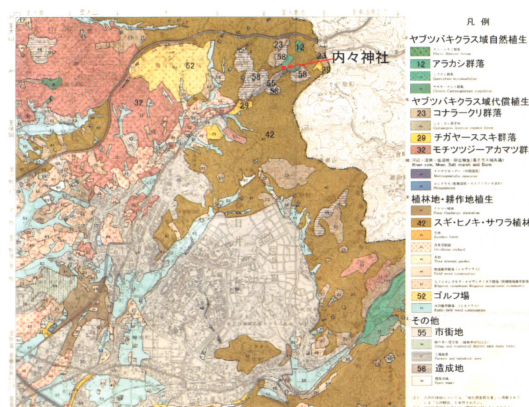


図5 内々神社付近植生図(『現存植生図』愛知県 瀬戸、昭和56年(1981):環境庁(現・環境省)に加工)

3. 内々神社の沿革

(1) 内々神社の歴史

内々神社は『延喜式神名帳』(927)に「春日部郡内々神社」と記された式内社であるが、天正12年(1584)の火災によって古記録を失っており歴史の詳細は不明である。祭神は建稲種命(たけいなだねのみこと)、日本武尊、宮簀(みやす)姫命。『妙見宮由緒書』(1702)によると景行天皇41年(291)に建稲種命を祭ったのが始まりであり、日本武尊が東征した帰路、内津に至りそこで副将軍であった建稲種命が駿河の海で水死した報を聞き、「現哉現哉(うつつかなうつつかな)」と嘆いた言葉が現在の地名と神社名の「うつつ」の元であるという。内々神社は中世までは地域一体の総鎮守であった。

中世の頃から内々神社は「妙見宮」と呼ばれ、本地垂迹説にのっとり妙見尊王を本地、建稲種命を垂迹とした妙見信仰で隆盛した。神宮寺妙見寺は天台宗密蔵院末寺として嘉暦年間(1326-1329)に創建され、天正元年(1573)まで妙見寺住職が内々神社別当を兼務した。慶長2年(1597)には豊田秀吉が朝鮮出兵の折、戦勝を祈願して社頭の大杉7本を伐採して帆柱としたという(妙見菩薩は北斗七星を神格化したものであり破軍星であることにあやかっただけ、と言われている)。内々神社はこの後も妙見信仰で栄え、尾張名古屋から東濃まで広範囲にわたって信者を集めた。天明8年(1788)、再び密蔵院四十一世最歡が別当となり、明治元年までこの体制が続く。安政5年(1858)には現在の社殿が寄進により信州諏訪の宮大工立川流の手で建造された。明治元年(1868)の神仏分離令により、内々神社と妙見寺は関係を絶ち、現在に至っている。(参照:春日井市郷土史研究会(1983)、『春日井の神社』、春日井市郷土史研究委員会、p.59-88)

(2) 近年における周辺環境の変化

i) 採石場開発

昭和29年(1954)内津工業が内津地域で最初の採石場を操業開始。内津の中・古生層に見られる砂岩及び第三紀層の砂岩が主に道路舗装等の碎石として使用されている。昭和30～40年代にかけては高度成長に合わせ生産が伸び、採石場は国道19号沿いを中心として山奥まで広がった。内々神社奥之院の内津上町川を挟んで西側正面には内津工業北山工場がある。山が削り取られ「聖なる場」としての内々神社周辺の自然環境は大きく改変されている。(参照2008年:ホームページ版『郷土誌かすがい』第34号(1988)、<http://www.city.kasugai.lg.jp/bunka/bunkazai/kyodoshikasugai/kyodoshi34.html>)

ii) 内々神社周辺整備事業(内津上町川拡幅、市道拡幅)

昭和57年度に内々神社庭園西側の内津上町川の拡幅及び護岸整備と市道拡幅が行われた。大雨の際、土砂の流入による庭園損傷が危惧されることと、碎石運搬の大型車輛が河岸を脅かしていたことに対する整備であった。

iii) 国道19号春日井バイパス開通

内々神社前を通る県道508号内津勝川線(通称・旧19号)は、明治以前、東濃地方で中山道が上・中・下街道と分かれて名古屋へ向かう下街道として人や物資の往来が盛んであった。昭和27年(1952)に1級国道19号と指定されたが、難所である内津峠を大型車が多量通行すること、交通量増加による渋滞で道路環境は悪化。昭和45年(1970)には内津峠にトンネルが開通し二車線で供用が開始された。昭和61年(1986)内々神社北側に19号バイパスとなる北山トンネル(春日井バイパス)、内津トンネル(内津バイパス)の工事が着手され、平成6年(1994)に完成し、内々神社前の道路は落ち着きを取り戻した。しかしながら春日井バイパスは内々神社と奥之院の間を走り、信仰の場としての一体性が分断されてしまった。

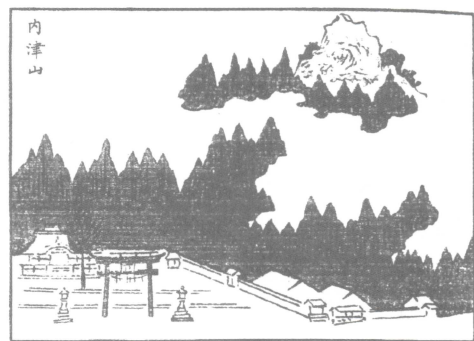


図6 名区小景「内津山」、弘化4年(1847)

(櫻井芳昭(2002):『平成14年度内津文化財祭 絵図に見る内津』、春日井市教育委員会文化財課)



写真1 本殿側から天狗岩方向を見る。大正、昭和初期頃。(内々神社絵馬堂に保管)

4. 内々神社庭園の概要

(1) 庭園の概要

i) 全体構成

本殿の北には南北約25m、東西約15mの池とその周囲を石組等で修景された庭園が広がる。池庭の東側には山が迫り、北東には天狗岩と呼ばれる岩盤がそびえ、その足元には巨石群が広がる。池の北には土塁が見られる。西は池から3～7m離れたところに幅約3mの内津上町川が流れる(図7,8)。北東部に山が迫り急傾斜地の狭間に位置するため、庭園の景観は立体的で力強く感じられる。庭園全体は図9のように、池庭ゾーン、天狗岩及び巨石群ゾーン、背景林ゾーンと3つのゾーン構成で捉えることができる。

池は本殿に近接した位置にあり、本殿背後の塀から約3mのところが南端の護岸となっている。池の中央には南北約6m、東西約4mの中島が設けられ、北東部には滝石組が組まれ清水が流れ落ちる。滝の水は内津上町川上流から取水し管で送水したものを池の北に作られた水路に送って流している。

現在、池の周囲に園路が設けられて回遊できるようになっているが、その高低差は大きい。中島には西側から木製の板橋がかかり島に渡ることができる。池の東南端にも板橋がかかっており、回遊園路につながる。

天狗岩は現在、池庭の背景としては認識できないほどにかん木や樹木によって覆われ、巨大な岩盤であることが認識できなくなっている。

ii) 池庭

池庭は護岸に多少の入り組みを持ちながらも全体としては南北に長い楕円形状であり、中島を一つもつ。ここでは石組が意匠の骨格となっている。本殿背後に回りこむとまず目につくのは池の南側護岸に据えられた厚みのある礼拝石と中島、そして池中の立石(岩島)であり、それらが呼応する姿が近景の大きな見所となっている。中島の護岸は比較的小さな石で組まれ、島上のいくつかの石の天端が水平に据えられることにより、一定のリズム感と緊張感を感じさせる。なお、重森三玲はこの中島を「鶴島」、滝口の一石を「亀頭石」と記述している(『日本庭園史大系第14巻』、1973)。

西岸の板橋の北には巨石が据えられ、また東岸滝口の上部には石組が三尊石のように組まれており、それぞれ景観のポイントとなっている。

池の面積は約270㎡とさほど広くはないが、石組と護岸石を巧みに組んで強弱をはっきりと出すことで豪壮堅固な印象を与える。補修時の写真から、水を抜いた際の護岸石の形状を確認するこ

とができる。1～3段に積まれた石が強弱のリズムを持って強固に組み合わせられ配石されているため、水が無い状態でも枯山水の石組として通用しそうな姿をしている。

ただし、池の東側斜面と東側護岸は石組が他に比して煩雑であるように見える。急傾斜地で山からの雨水流入が激しいため石が傾いたり、土留めの役割も果たしている石組を補強するなど、歴史の中で何度も手を加えられてきたと推測される。

池庭にそそぐ滝水は北東に据えられた三尊石の主石の東脇から導かれている。その水源は庭園から約800m北部、中央高速道のすぐ南で内津上町川の水を堰き止めた小さな貯水部から取水し塩ビ管で送水されている。滝口に流れこむ手前約35mは現在、コンクリート水路となっている。

iii) 天狗岩と巨石群 ―池庭の背景―

池庭の北端の護岸から北東約20mの位置に古くから「天狗岩」と称されている岩盤がある。天狗岩の庭園に面した地際の幅は約20mあり、そこからほとんど垂直に近く岩盤が立ち上がる。庭園から見て天狗岩の最初の頂点の高さは約38mあり、そこから北東へ露岩部はいくつかの塊となってさらに高く続いていく。以前は岩肌が露出し突出した景観となっていたそうだが、現在はコケ、かん木等の植物が岩肌に繁茂し、また手前に樹木が生い茂っているため、池庭側から見ると岩盤の気配が感じられるのみとなっている。

池庭の背後には庭園の境界を示すかのように土塁が小高く盛り上がる。その北部、すなわち天狗岩西の平地に巨石が散在する。これらは土塁に隠れて庭園から見ることにはできない。巨石の大きなものは幅10m、高さ5mを超える。磐座のようにも見える巨石群は、重なり合ったり単独で転がったりし、北東部の一石は内津上町川にせり出している。巨石群の中央を南北に道が走りこれを北へ進むと奥の院への山道に通じる。道の東側の巨石の足元には、比較的新しいものだが小さな鳥居が据えられ小石が積まれている場所があり巨石に対する信仰も窺うことができる。巨石群の間には、植林された樹齢20～30年と思われる樹齢の若い細いスギが林立している。

iv) 植栽

池庭の護岸にはドウダンツツジやサツキ、イヌツゲなどが植えられている。しかし、これらは成長に合わせて刈り込み管理されているため、石組を隠してしまっている。また池周囲には実生の木々が伐採されずに剪定され維持されているため煩雑になり、景観のポイントとなる石組を隠している。下草もよく繁茂しているが、これは自然の山裾に位置するためだと思われる。背景となる池の北東部には樹高25mのヤマザクラが枝を広げ、シンボリックな樹木となっている。

(2)庭園の考察

内々神社庭園において特異なのは、神社本殿の背後に池庭があるというその配置である。一般的に、神社本殿の背後には観賞用の庭園は存在しない。恐らくは社殿のある場所に妙見寺の書院が建てられていた時代があり、池庭は書院から見る観賞用の庭園として造られたと考えるのが妥当であろう。

作庭時期は妙見寺が栄えた頃と思われ、重森三玲の推測では江戸初期、元禄頃(1688-1703)であろうとしている。その根拠には、背景の山を借景ではなく庭園そのものの景色として取り込んでいること、前の時代に比べ南北が短くなっている池の形、鶴または亀として表現された一つの中島、池中に立てられた数個の石、中心からずれて配された滝口といった庭園様式の特徴を挙げている。妙見寺書院がいつ失われ、神社社殿に建て替えられたかは不明だが、現在の内々神社本殿は文化7年(1810)に造られ、以後建物と庭園の配置関係に変化はないと思われる。

しかしながらここで最も重要なのは、内々神社庭園が単に独立した池泉庭園でなく、背後の天狗岩と巨石群まで含めて一体的空間として作庭された点にある。岩盤と巨石群を背景とした池庭という言い方もできるが、この地の信仰の始まりが露岩の多く見られる自然地形の聖性にあるとしたら、天狗岩を主景としてその手前に池泉を設けたという言い方もできる。

図9では礼拝石に立った時の視線のあり方を図化した。礼拝石から天狗岩までの視線の軸線を強調するかのように岩島と中島(鶴島)が左右をはさみ、その延長上に滝口、そして終点に天狗岩が眼に入ることがわかる。

日本庭園には一般に「影向石(ようごうせき)」と呼ばれる役石がある。これは「神仏の来臨を象徴的にあらわす岩盤の露出部分や庭石」(小野健吉『日本庭園辞典』2004、岩波書店より抜粋)であり、天狗岩を影向石と見立てて庭園を構成したということもできるのではないか。重森は「影向石」という言葉は記していないが、池護岸の礼拝石は天狗岩(重森の言葉では「山上部の磐座」)を拝するためのものとしている。

現在は池泉庭園のみが庭園として管理されがちだが、天狗岩の景観まで含めて、自然と人工を一つのものとして認識し、整備していく必要があるだろう。

5.維持管理指針と今後の展望

(1)維持管理

維持管理には大きく石組などハードな部分の管理と、植栽などソフトな部分の管理に分けることができる。ハードな部分では庭園の形状など、長い時間経過の中で作庭当初の姿から大きく変化する。特に池の東部は急傾斜地であるため土砂崩壊が多く、池の一部が埋まるなどの被害も起こった。このため近年にも復旧及び新たな土留め対策の処置がなされている。今後再び池庭の東面が何らかの災害を受けた時には、文化財としての修復と土木的修復が明確に区分されるような適切な工法の選択と判断が必要となると思われる。

植物は生きているため常に多くの管理を必要とする。庭園は建築等と異なり作庭当初の形態を固定されたものとして維持し続けることはできず、その大きな要因が生き物としての植物の変化に起因している。枯死したもの、実生で成長したもの、新たに庭園樹として植えられたもの等、その変化を読みきることはできない。また、神社周辺の自然環境の変化は庭園に生態学的にも景観上も大きな影響を及ぼしていると思われる。どの時期の植栽景観を「正」とするかは内々神社庭園の場合、資料もなく判断が難しい。

現在は内々神社の依頼により年2回地元の造園業者による樹木剪定及び池を含む清掃が行われている。そうした管理に際し、その時々適切な景観を創出するため、専門家の判断の元で管理を行うようにする必要がある。

以下の各ゾーンの説明は図9の分けによる。

i) 池庭ゾーン

池庭ゾーンの植栽管理では基本的に庭園の骨格を構成する石組が樹木や下草の繁茂により隠れてしまわないように配慮する。また剪定方法によって樹木を3種類に分ける。①常に適切な大きさに刈り込む樹木、②整枝剪定する樹木、③自然形状に生育させる樹木である。

①では、刈り込まれて管理されてきた木々の多くが大きくなりすぎている。縮小するのがふさわしいものは、強剪定で枯死しないよう数年の時間をかけて剪定を繰り返し、元の適切な大きさに導く。特に池西側のドウダンツツジは大きくなりすぎているものが多いが、背景として大きいままで良いものと、景石を隠してしまっているため極端に縮小する必要のあるものとを判断する必要がある。

実生で生育してきたモミジ等には一般の庭木の様に枝づくりに剪定されているものがある。伐採してよい樹木か、あるいは③として自然樹形で生育させていくかを検討する必要がある。

下草は湿気の多い谷地であるため繁茂しやすく、すぐに景石



図8 内々神社庭園断面図 S=1:1500

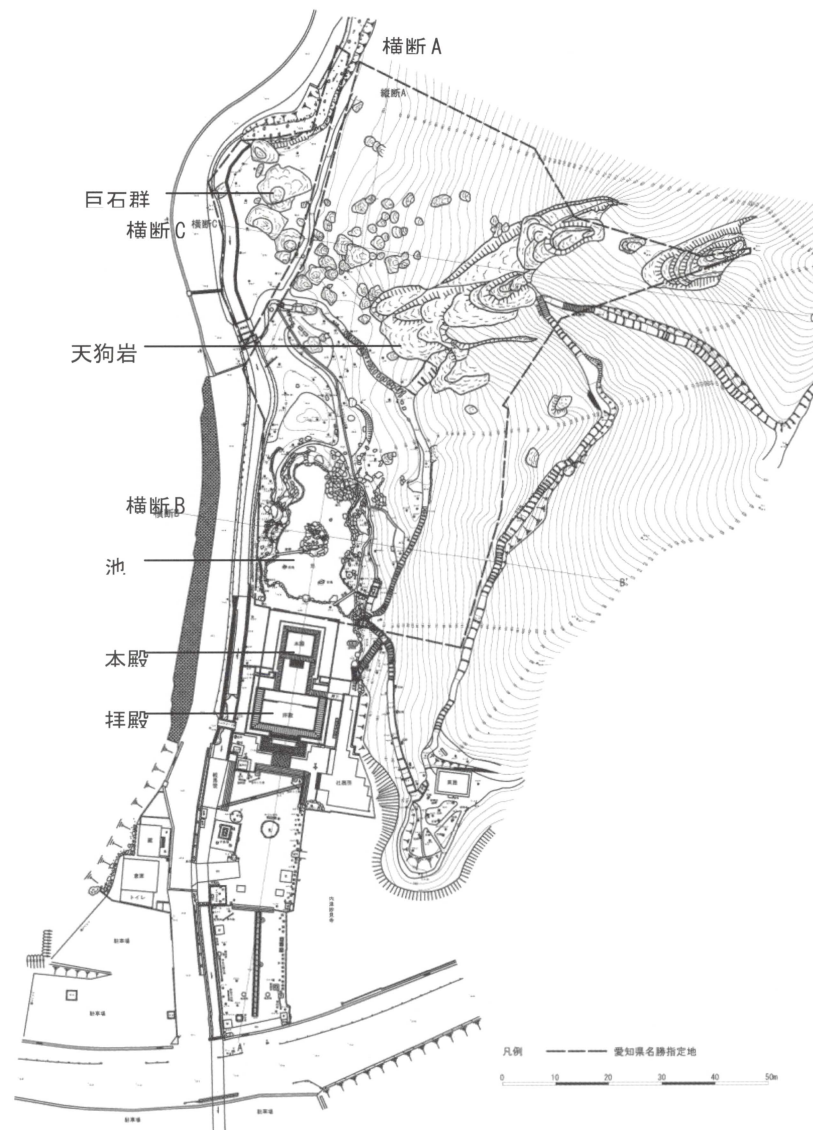


図7 内々神社庭園及び周辺 現況平面図 S=1:1500



図9 内々神社庭園及び周辺ゾーニング図 S=1:1500



写真2 社殿裏より池庭を臨む



写真3 池庭北端高台より社殿を背景に池庭を臨む



写真4 池庭東上段部園路より池庭を臨む



写真5 滝口正面の姿

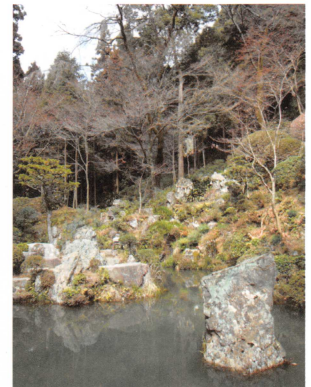


写真6 礼拝石からの景色。奥に天狗岩の岩肌がかすかに見える。



写真7 巨石群と背景にスギ林。この道を北へ進むと奥の院への山道に出る。地面に敷設されているのは池と手水への送水管。



写真8 天狗岩の足元の露岩

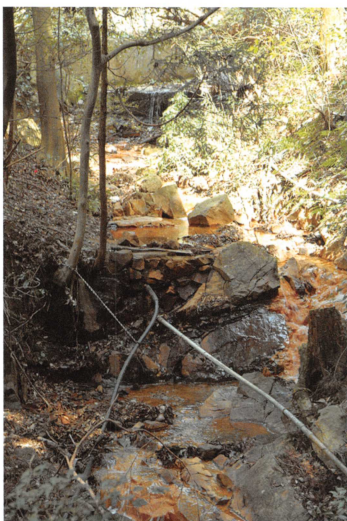


写真9 中央高速道の南を流れる内津川の貯水部。ここから取水し池へ送水している。

を覆い隠してしまう状況にある。山野草として観賞できるものは残し、他は徹底的に除去する。

池の東側の土砂崩落復旧時には石による土留めと植栽による地固め等の対処がなされている。その中には新たに景観木が加えられているが、樹種等が背景の自然林において妥当であるかの検討を行い、適切な景観形成への誘導が必要である。

ハードな部分では、土留めという機能的必要性のため新たに石積など工作的要素が加えられた個所がある。新たに手を加えた部分を明確にし、文化財庭園として本来の形状の記録を失わないような措置が必要である。また、欠損した灯籠等は撤去する。

ii) 天狗岩及び巨石群ゾーン

この地が長らく信仰の地となった初源的景観であろう露出した天狗岩の岩盤と足元の巨石群をはっきり見せ、その存在をより鑑賞者に感じられるようにすることが大切である。そしてその景観が池庭と一体化し、つながりあるものとして整えられる必要がある。

そのためには巨石群の間のスギ、ヒノキ、カシ等の木立は大きく生育した数本と、巨石と上町川の間に生えているもの以外は伐採する。下草を除去し見通し良く聖性が感じられる景観を常に保つ。天狗岩上に繁茂している草や灌木も多くのは取り除く。ただし庭園的美しさを保つため、すべてを撤去するのではなく、あるものは残すという判断をしながら整えることが重要である。

iii) 背景林ゾーン

自然の遷移に任せるゾーンとする。園路脇だけは低かん木、下枝の適切な除去を行い少し明るい快適な歩行環境として整える。

(2)まとめ ―今後の展望―

仏教の流れを汲む観賞用の池泉庭園が内々神社の社殿背後に存在することは、内津における神仏混交の歴史的・宗教的複雑性を顕著に現している。アニミズム的自然信仰、地域神の信仰、国作りの神の信仰、自然崇拜に近い仏教の信仰等。時を経ながら変遷してきたものが、今日、一つの場所に同時にそれぞれの断片を残しながら混在している。古い資料が失われ事実が明らかでない中で、内津の神仏や信仰の変遷を具体的に明らかにしようとすると、複雑な迷路に入りこんでしまう。しかし、日本人の自然を畏れ敬う「親自然信仰」が時には神に、時には仏に姿形を変えここにあると大きく捉えることは可能であろう。現代人が読み解こうとすると複雑に思える信仰の変遷も、自然と関わる上での日本人のオーソドックスな姿であったともいえる。そしてそれは今日見直されるべき「日本人の自然観の全体像」と言い換えることもできる。日本人の自然信仰の一つの全体像が内々神社には存在していると言えるのではないだろうか。

今後、内々神社庭園と天狗岩、巨石群との一体性がより認識

され整備されると共に、信仰の原点と考えられる奥の院への散策路までも含めて整備がなされ、日本人の自然信仰の全体像を説明、検証、体験できる場となること、全国的にも稀な文化財庭園として神仏の入り組みがわかりやすく鑑賞者に解説されるよう情報の整理と環境の整備が望まれる。

資料：聞き取り調査

内々神社の沿革や地域における在り方、庭園と周辺環境の変化、管理方法などを知るために内々神社関係者の方々より聞き取り調査をおこなった。

(1) 内々神社関係者

日程：2008年7月30日、於：内々神社社務所

対象（敬称略）：波多野茂（市文化財保護審議会 会長）、村中治彦（市文化財保護審議会委員）、櫻井芳昭（市文化財保護審議会委員）、小林剣治（内津文化財保存会会長、神社総代）、梶田忠男（宮司）、稲垣孝彦（禰宜）、鶴飼和昌（見性寺寺総代）、長谷川脩造（神社総代）、鶴飼建（内津区長）、夫馬一夫（神社総代）

・庭園の変遷について。特に天狗岩との関係において。

伊勢湾台風（昭和34年）前は天狗岩はよく見えていた。それは氏子が奉仕でスギ、ヒノキを育てるため下刈りを行っていたためで、岩を見えるようにしていたわけではないが、昔、岩にはもつと水気があり、ラン類が着生していた。伊勢湾台風以後も幹周5.5m位のスギの太木がいっぱい残っていた。今は掃除するが、下刈りは行っていない。

・庭園奥、天狗岩付近のスギはいつ、どのようにして植林されたのか。

伊勢湾台風で巨木が倒れた関係で地元の人が植え始めた。昭和40～45年頃から植えたのではないかと。大石の前に大木が以前はあった（まだ切り株がある）。湿気があり、アオキ、チャノキが野生化していた。内津のスギは神のものだから切ってはいい、と古老より伝えられていた。明治になって国のものになってしまうから、切って売ってしまった。昭和になってからは神社庁の管轄になりむやみに切れなくなった。

・現在とはどなたがどのように庭園や背後の森を管理しているのか。

内々神社の依頼で関正造園が年に2回（8月、12月）、池周囲の剪定をおこなう。

・庭園が付属していた建物（妙見寺、内々神社社殿）との関係、その変遷。

「尾張国絵図」の正保の絵図は尾張で発見された一番古い絵図で畳4畳半ほどの大きいものだが、そこに内々神社の社殿な

どがカラーで描かれている。その他絵図にあるものは皆社殿で寺の書院を描いたものはない。文章としては「寛文覚書」、「内々妙見院由緒書」が残るが、建物の詳しいことは書かれていない。御戸開きといったようなことは部分的に書いてあるが。横井也有も自然景観や岩、道のことは記しているが庭や建物は書いていない。

・現在の内々神社と妙見寺との関係

現在、関係はない。妙見寺の住職さんはカンドウさん。見性寺が檀家寺であるので、地元の人との縁は薄い。妙見寺の檀家はゼロ。妙見信仰の信者さんが方々から来る。昭和初め頃と思われる妙見講のパンフレットを宮司さんが見つけた。妙見信仰は江戸時代に栄えており、内々神社が軒を貸して本屋を取られた形で、お宮さんの名前も妙見さんになってしまった。神仏分離例でお寺と線を引き、名前も妙見宮から内々神社と復活した。

・内津における奥之院までを含めた人々の動きについて

（仮説ですが）内津の地形は美濃・尾張の地形の中でも古生層で幽玄な形をしている。神様が降下するのに相応しい場所が奥之院の岩だったのではないかと。そこに美濃や尾張の人たちが神聖な山として来て修験道などの訓練を行った時代があったのではないかと。最初に小さい祠が岩上に祭られて、そこから南垂れの斜面で街道へ向かって開けるから、街道に近いところにお参りできるようなものが出来てきたのではないかと。内津は無人だったが、修験で人が集まり次第に参詣者も増えてそこで御戸開きがあり、人が住むようになってきたのではないかと（御戸開きは平安と天正の2回あったと記されている）。そして妙見という当時は新しい宗教が人気を博した。信者の範囲は広域で、熱田、津島、内々の三社は「尾張国絵図」に登場する。

・古代から内津の巨石が信仰の対象となっていた遺跡や記録の有無…高蔵山には磐座があるが、内津ではそういった記録はない。奥之院の入り口に「巖谷神社」とあるが、あれは明治頃、御岳講が流行っていた際に守山の志段見の信者さんが建てたものではないかと。内々神社とは関係のないもの。奥の院には御岳講のほかに月山講のおこもり堂もあり、そこには日輪天尊（白山信仰のくぐり姫）の絵も描かれている。色々な信仰が重複している。日蓮宗の参詣者も多い。

・その他

松根油を取っていた。寛文7～天保11年には松根掘取禁止令が出て、土砂災害から保護していた。戦中は内々神社の境界から外は禿山となり、そのためサクラなど落葉樹が生えてきたのだろう。内津のサクラはほとんどヤマザクラ有名だったが、現在は管理がなされずなくなってしまった（ツルがまきついてマント群落になってしまう）。

・資料、記録の有無

古い写真(特に伊勢湾台風の前後のものや、庭園および天狗岩の様子がわかるもの)。…大正、昭和初めの奥の院の写真が絵馬堂にある。また、昭和2年に撮影した、人物が2人入った全体写真が鶴飼史郎さんのところにあるはずだが。

「尾張国絵図」正保4年(1647)内々神社が描かれているもの。…4.5畳の内の一部。正保の国絵図が最古(下書きは徳川美術館に)。

内々神社境内立木調書(昭和5年7月26日)…愛知県名勝天然記念物の悉皆調査の一環ではないか。オグリテツジロウという人が春日井に調査に来た。報告書はあるはず。

内々神社社叢調査(春日井自然友の会)昭和45年…その頃には大木はほとんどなくなっている。

米軍撮影昭和22年航空写真[春日井市][内々津神社付近]…春日井市図書館所蔵。奥之院の位置は記してあるので正しい。この頃、道がよく見えて写っているのは禿山になっていたから。

内津村絵図…明治2年、鶴飼正俊氏所有。勝川の医師

(2)その他

i)内々神社氏子の方、2008年8月8日(通常維持管理の剪定作業日において)

巨石群よりさらに北にあたる現在の国道19号線及びその北の内津工業北山工場一帯の地域も広範囲にわたって露岩の状態があった。何十メートルにもわたる屏風状の岩壁があったが、バイパス建設時になくなった。

ii)関正造園、平成21年3月18日(関正造園の関わった庭園工事について聞き取り)

- ・国道19号線ができる前は夏でも涼しい風が山から吹き下りてきていた。
- ・池の北にある土手は昔からあった。段々と崩れて南側の回遊路をさえぎる状態となってきた。
- ・園路の階段を含め、新たに据えた石は周辺の山石を使用した。外周の園路には揖斐石や木曽石などを持ち込んだ部分もある。
- ・池護岸や石組みの込み石には周辺の小石を利用した。
- ・池底に敷き転圧し、また込み石を詰めるための赤土には小牧市大草の建材店のものを使用した。恐らく小牧近辺の赤土だと思う。
- ・現在池にかかっている橋は地元のひとと土木店が設置したものではないだろうか。
- ・昭和60年の工事が終わった段階で天狗岩は全部見えていた。

追記

1. 本書は平成21年3月春日井市教育委員会より発行された『内々神社庭園現況調査報告書』を短縮したものである。
2. 本調査は愛知県指定文化財(名勝)である内々神社庭園の適正な維持管理指針を明らかにするための現況調査であり、平成20年度事業として春日井市教育委員会が名古屋造形大学に委託したものである。なお、測量調査は名古屋造形大学の補助により実施した。
3. 本調査は下記の体制にて行なった。
調査及び報告書とりまとめ:名古屋造形大学 岡田憲久、(協力)測量:加藤博俊(設楽測量)、調査補助・資料整理:田井洋子(景観設計室タブラ・ラサ)
4. 現況写真はすべて岡田憲久が撮影したものである。
5. 地名と神社名では「うつつ」の漢字表記が異なる。地名の場合は「内津」、神社名は「内々神社」と記述した。
6. 本調査においては特に内々神社関係者をはじめ、春日井市文化財保護審議会委員、郷土史家の方々など多くの方にご協力いただいた。記して謝意を表す。

参考文献リスト(順不同)

- ・東春日井郡役所(1923):『東春日井郡誌』、東春日井郡役所、p.594, 595, 622-630
- ・米軍撮影昭和20年代空中写真(春日井市、内々津神社付近)、日本地図センター
- ・横井時綱(1957):『尾張内津神社の庭園』、郷土文化(第12巻第2号)、名古屋郷土文化会、p.469-472
- ・春日井市教育委員会(1970):『文化財』、春日井市教育委員会、p.11
- ・重森三玲(1973):『日本庭園史大系14 江戸初期の庭(一)』、社会思想社、p.123-131
- ・伊藤浩(1974):『郷土史の散歩』、高蔵寺ニュータウン藤山台自治会、p.22-26
- ・愛知県郷土資料刊行会(1974):『張州府志(全)』愛知郷土資料叢書 第19集、愛知県郷土資料刊行会、p.301, 341342, 820
- ・安藤直太郎(1979):『内々神社庭園』、郷土誌かすがい(第3号)、春日井市教育委員会文化財課、p.1
- ・愛知県郷土資料刊行会(1979、オリジナル1844)『尾張志上巻』復刻出版、愛知県郷土資料刊行会、p.743, 757, 760, 817, 818, 852
- ・春日井市郷土史研究会(1983):『春日井の神社』、春日井市郷土史研究委員会、p.59-88

- ・春日井市史編集委員会(1984):『春日井市史 地区誌辺』、春日井市、p.21-46
- ・澤田天瑞(1986):『内々神社庭園』、中部庭園同好会Vol.13
- ・春日井市郷土史研究会(1986):『春日井の歴史物語』、愛知県郷土資料刊行会、p.26-29
- ・安藤慶一郎(1988):『新修春日井市近世村絵図集』、春日井市、p.10-12
- ・春日井写真集編集委員会(1989):『写真集 明治大正昭和春日井』、創文出版社、p.17、18
- ・穂積健(1992):『目で見る春日井・小牧の100年』、郷土出版社、p.48、60-63
- ・伊藤浩(1993):『文学の森』、春日井市教育委員会文化財課
- ・岡田啓、野口道直(1998):『尾張名所図会 後編』、臨川書店、p.380-385
- ・伊藤浩(1999):『妙見寺と内々神社』、春日井市教育委員会文化財課
- ・村中治彦(2001):『妙見信仰—日本三大妙見と内々神社—』、春日井市教育委員会文化財課
- ・櫻井芳昭(2002):『平成14年度内津文化財祭 絵図に見る内津』、春日井市教育委員会文化財課
- ・波多野茂(2003):『内津の豊かな自然に学ぶ』、春日井市教育委員会文化財課
- ・村中治彦(2004):『内津妙見信仰—江戸時代を中心に—』、春日井市教育委員会文化財課
- ・白幡洋三郎(2005):『名園五十三次39内々神社庭園』、中日新聞
- ・高橋敏明(2005):『内津の妙見信仰』、春日井市教育委員会文化財課
- ・ホームページ版『郷土誌かすがい』第34号(1988)、<http://www.city.kasugai.lg.jp/bunka/bunkazai/kyodoshikasugai/kyodoshi34.html>(参照2008)
- ・櫻井芳昭(2006):『春日井をとる街道23 図会にみる景観』、郷土誌かすがい第65号、第65号のホームページ(参照2008) <http://www.city.kasugai.lg.jp/bunka/bunkazai/kyodoshikasugai/kyodoshi65.html>、
- ・富山博(2006):『立川流建築の魅力を探る—内々神社社殿と御舞台—』、内津文化財再実行委員会・春日井市・春日井市教育委員会
- ・岡田憲久(2007):『内々神社庭園—日本人の自然観—』、郷土誌かすがい(第66号)、春日井市教育委員会文化財課、p.12
- ・高橋敏明(2007):『郷土幻考2 慈妙—伊勢、内津、密蔵院』
- ・高橋敏明(2007):『郷土幻考4 内津—妙見、日本武尊、絵馬』
- ・岐阜国道 文化 美濃(ホームページ)(参照2008)、<http://www.gifukoku.go.jp/bunka/mino/touge/100/index.htm>
- ・名古屋造形芸術短期大学事務局(1990):『第22回卒業生作品集』、同朋学園 名古屋造形芸術短期大学、p.100